

# 後継者は誇りと夢と能力ある者に

## 農業経営者ルポ 第24回



類似の牧場での林間放牧



平成8年農林水産祭天皇杯を受賞して天皇后両陛下に経営内容を紹介する



駒谷 信幸さん (55歳)

北海道夕張郡長沼町東5線南11番地  
☎01238-4-2836

●プロフィール  
昭和17年生まれ、昭和41年、弟克明氏とともに農事組合法人駒谷農場を設立。現在の自作地は190ha。長沼町に水田60ha（水稲作付け44ha）、畑20ha。さらに、自宅から180km離れた様似町に借地を含めて合計270haの林間放牧による肉牛の牧場を経営する。肉牛は東京のスーパー三徳に年間約150頭を契約出荷。その他にも農業経営のかたわら、自ら資金を出資して特別介護老人ホームを設立するなど地域に対するボランティア活動や村起こしや農協改革へも力を注ぐ。平成8年、第25回日本農業大賞（農林水産大臣賞）受賞、第35回農林水産祭天皇杯受賞。

●そんな暮らしと決別した。

父に農業をやれと言われて飛び出した自分であったが、その時には家の農業をすることしか選ぶ道はなかった。駒谷さんは、自分を律することができず無為に遊んでしまった数年間をその時に恥じた。自分が机を並べていた同級生たちは自分よりずっと先を歩いているように見えた。そして、何も知らず、何もできない自分がそこにいた。言葉通り自分を最低の人間だと思った。

しかし、駒谷さんはそれで卑屈になることはなかった。むしろ、自分の無知や無力さに気付き、そんな自信のない自分であればこそ、誰の言葉にも耳を傾けることができ、教えを乞うた人の話しを謙虚に聞くことができるようになったのだと述懐する。

就農してから数年後、23歳の駒谷さんは、空知支庁に新設された空知農業学園へ推薦されて入学した。将来に可能性のある後継者39人が各地から推薦された。冬の合宿研修と通信教育で3年間にわた

●駒谷信幸さんの学歴は中学卒である。小学2年から父の手伝いをしてきた。もつと学校に行きたいと思ったが、よその家にいき、何もしてやれないのだからと妹達は進学させても、父は駒谷さんにそれを許さなかった。高等小学校2年まで学校に行ったという父は、「新制中学3年まで行っただからお前は自分より1年余計に勉強した。それ以上は必要ない。自分が教えたこと、これまでに学んだことの全てを実行できて、それでもなお足りないと思うのならその時、俺を恨め」と駒谷さんに言ったという。駒谷さんの父親は、どんな知識もどんな理屈を語れても、実行の無いものを評価しようとしなかった。限られた人生の中で何を知るかではなく何を行なうかこそが肝心なのだと言えたかったのかもしれない。

●中学生の駒谷さんに理解できる理屈ではなかった。そんな父に反抗し、駒谷さんは家を飛び出した。極道の世界の入口にいた。でも、ある事件をきっかけに、

つて農業を学ぶ学校だった。

ひと冬の寮生活と3年間の通信教育を経て卒業した農業学園の卒業論文に、駒谷さんは15haの農地を30haに規模拡大する夢を書いた。当時の北海道の平均耕地面積は5ha、30haは夢の様な大規模経営だった。

昭和41年、24歳で結婚し、父から15haの農地を継承すると、弟の克明氏とともに農事組合法人駒谷農場を設立した。二人が農地を分けて小さな城の主になることより二人して大きな城を作ろうと話したのだ。

それからの駒谷さんは規模拡大に邁進した。しかし、条件の良い田を買う金など無かった。あつたとしても誰も譲ってくれる時代ではなかった。駒谷さんは、誰も手を付けない傾斜のある農地や沼の様な田、田の中に20cmもある木が生えているような所を手に入れては自分の手で土壌改良し基盤整備した。しかし、駒谷さんはその田を売った。そのお金でやはり条件の悪い、でも前より大きな農地を買って、面積を広げていった。駒谷さんの規模拡大とはその繰り返しだった。何の補助金を使うわけでもなく、自分の金と汗と技術で農地改良を進めるのだった。結果として駒谷さんの規模拡大は地域の水田改良をすることにもつながっていったわけだ。

駒谷さんは、自然にも歴史の流れにも人は逆らうことはできない、という。その流れに身を任せつつ、自分の役割を自覚したものが思いを遂げられるのだ。駒谷さんは農業という自然を利用する仕事、自らの手による土地改良を伴う規模

拡大の経緯を通してそれを学んだと話す。

### 風土を活かし常識から自由になる

36歳の時、駒谷さんは「北海道土を考える会」の第2回目の会合に初めて参加した。駒谷さんと同郷で当時の会長である宮北健一郎氏に誘われて参加したものだ。土を考える会については本誌17・18号の座談会をご覧いただきたい。

その会は、力のある経営者たちが規模拡大への夢を語り合う場でもあった。そして、経営作目は異なっても、集まる人々には共通する理念があつたようだ。彼らがそこに集つたのは、規模や売上を競うことではなかった。「土」と「経営」を考えることだった。彼らにとつて「土」とは「経営」そのものであり、「経営」の本質とは「土を作る」こと「農地を改良する」ことだった。規模拡大もその前提でこそ語られることだった。同時にそれは彼らの「生き様」を語り合うことでもあった。彼らは農業経営者としての自負を競い合い、励まし教え合う仲間だった。

当時、駒谷さんはすでに水田50ha、畑20haの計70haまで経営規模の拡大を達成していた。そこで出会った人々が語る経営規模やその経営内容、そしてその理念を聞いて駒谷さんは圧倒させられた。

なんと世間知らずの自分がいるのだろうと思った。人一倍鼻柱の強かった駒谷さんではあつたが、自己紹介の時に「長沼の駒谷です」と、うつむいて名前をいうことしかできなかった。

小さな地域の中で天狗になっていた自分を見つけ、そして活を入れられた駒谷さんの第二の飛躍がその時始まった。

彼らが語る経営への夢や理念は、そのまま駒谷さんのものだった。そして人生のテーマもそこにあつた。

「1tの収穫をしたのなら同じだけの有機質を戻せ」「農業は自然を支配し加工することではなく、自然に逆らわず利用させて貰うこと。常識にとらわれず風土を活かせ」と語る駒谷さんは田の改良の原点は堆肥と客土であると考えている。

また、駒谷さんは自分の水田への堆肥調達のために、都市化に追われても養豚家として生きたいと望んでいる後継者に、無償で土地を提供して経営を援助してた。家の近くで養豚と稲作をやっている離農した農家を駒谷さんが居抜きで買上げ、それを彼に提供したのだ。やがて、その後継者も養豚組合の組合長になり、ハムメーカーに生ハム専用の肉として相場より高く売れるような生産者に育つた。

この逸話は駒谷さんの人間としての懐の深さを示しているが、駒谷さんは「水田に大量の堆肥が欲しい者にとつて、近場にいる養豚家は宝です。堆肥の一番の問題は輸送コスト、彼に協力することは自分の経営の大きな資産を作ることなのであり、そこに農業経営発展の土台がある」とあつさりいう。

規模拡大のために土地改良屋になってしまふ、堆肥を求めて養豚家を自費で誘致する等、駒谷さんの経営手法や経営戦略は人々の常識を越えている。様似町に牧場を作る前史もユニーク

だ。減反をきっかけとした水田での飼料作が始まりだ。昭和45、46年だった。転作した水田に牧草を作ると収穫の最中から酪農家が買いに来た。しかし、手間の割に値段が合わなかった。そこで、牧草を作った水田に雄ホルスタインを買ってきて放牧してしまふことにした。収穫の手間は無くなったが、収穫しないと奨励金は出ない。もう一つ旨味がない。そこで、種を付けた妊娠牛を売ることにした。しかし、駒谷さんには牛に関する知識もないし、これから勉強したのでは間に合わない。そこで、帯広畜産大学を出た人に頼んで見て貰うことにした。市場へ行って牛を見て、選んでもらって1頭について1万円払うことにした。その人にしては週に1度市場にいった牛を見るだけで金になる。そして駒谷さんにとっては最高の技術が手に入る。見て貰った牛を春に買って種付けする。この仕事は儲かった。府県の経済連の人が酪農家に頼まれて買いに来るのだ。

しかし、それも5年ほどで止めた。原因は稲の防除だった。当時は一斉防除・徹底防除という掛け声で農薬散布が激しく、それに文句を言っても無駄だと思つたからだ。そこで考えたのが林間放牧による肉牛生産だった。牛肉の消費はこれからも伸びると思つたからだ。日本では誰もやっていないことだった。

「後から一流の人に追い付こうと思つても無理。それなら、その人がやってないこと、やれないことをする。そして日本の常識は世界の非常識でもある」それが駒谷さんの発想の原点だ。

林間放牧で、自然の中で牛に子供を生ませる。和牛ではそれに耐えられないが母牛はアンガスで肉質を上げるために4頭の和牛の雄を種に使ったF1だ。F2までは取るがそれ以上だと放牧には耐え切れないという。

林間放牧の牧場の場所を決めるに当たって、駒谷さんは道内で早くから和人が移り住んだ気象に恵まれた場所を探した。伊達、様似、厚岸の3つの候補地から土地が手に入れた様似町を選んだ。地価もあるが、放牧だからこそ栄養価の高い牧草が育つ場所が必要だったのだ。農業経営を家の回りだけでやる時代は終わっているのだと考える。

牧草地と林を含め270haの牧場で牛の数は正確には把握できない。年間150頭を契約した東京のスーパードーに出荷する。普通なら8産というのが標準だと思いが、放牧にすると2、3産は余計に産ませることができるといふ。雪のある1〜4月には生まさず、子牛は6〜8ヵ月で畜舎に入れる。餌は、夏の間は牧草柵で牧草地を幾つかの牧区に分け、草をきれいに食べるように仕向け、それを循環させる。冬の間は、乾草とデントコーンのサイレージを給餌する。他にベールにした稲ワラを与える。牛は林の中のササを食べ不足を埋め合わせる。冬の方が手間がかかる。肥育は畜舎内ですが、水田や畑から出る小麦クズ、大豆、小豆カラ、特裁米の糠、稲ワラなどで配合飼料のベースを作る。その配合と給餌は機械化されたコンプリートフィーディングだが、原料はなるべく国産、自家・地域内調達をめざす。

牛は原野の厳しいけど自然の環境の中で生まれるが、最終段階は快適にしてやる。牛のストレスを最小限にする管理をするのだそうだ。

こんな人が考えも付かぬような経営のアイデアの例は他にも幾つもある。

二人の個人農家と共同で作る9棟の育苗ハウスの利用が面白い。

駒谷さんは、稲の他に牛、20haの畑作などをやるが、育苗ハウスを使つてのメロンや花の栽培にも手を付けている。

メロンの栽培も、自分でやったのでは良いものではない。試験場を定年退職した専門の先生に実地での栽培を依頼する。能力のある人に場を与えれば、その人は経営者にはできない仕事を可能にする。花もそうだ。農場の人間はその人からノウハウを学ぶのだ。ただし、駒谷さんはどこにでもある園芸での土壌障害の発生を見越して、ハウスの構造を考えた。

最初は移動式のものがないかと考えたがコスト的に無理だった。そこで、始めたのは、9棟のハウスの中を順送りに水田にしてしまうことだった。連作障害を起ささない環境を作るのが経営者の仕事なのだ。

駒谷さんは水田こそが日本の自然や風土にあつた技術なのであり、それをいかしてこそ低コストの農業が可能だと考えている。

メロンや花はまだテスト段階だが、試食させてもらったメロンはなんと糖度19もあつた。すでに、肉牛で取引のあるスパーだけでなく、市場からも本格的な前から駒谷ブランドで売りたいとの引合いがある。

## 後継者は子供でなくてもよい

駒谷さんは早くから後継者は子供達である必要はないと言いつつ続けた。現在の克明氏の子供と駒谷さんの娘夫婦が就農し、長男も来年から入りたと言っている。父に「お前は農業をやれ」と言われて反発した駒谷さんだが、子供たちには「お前たちの望む仕事を選べ、駒谷の子供だから駒谷農場を継げるわけではないぞ」と言ってきた。

駒谷さんは「得手に帆上げる」仕事ができるのが人生の幸せであり、継ぐのは事業でも財産でもなく親の誇りだと考えているからだろう。だから、子供が無理して農業を継ぐことはない。そして、駒谷さんに取って「得手」は農業であり、それを経営するという役割だった。

そして、こうもいう。法人である限りそれは公のものなのであり、作った限り潰してはならない。だとすれば、その能力の有るもの、そしてそれを発展させる力のある者が継がねばならない。

こんな逸話もある。現在、様似町の牧場を管理している娘さん夫婦のことである。

娘さんは子供の頃から死んだ子牛を見て獣医になるというような動物好きだった。そして酪農学園大学に入り、そこで現在のご主人と行き合った。そしてある夏休み、駒谷さんに「お婿さんを連れてくるから牧場をやらせて」と言ってきた。駒谷さんの答えは「駄目だ」である。そして、駒谷さんはこう話した。

「お婿さんなどと言うな。婿を取った

らお前は生意気になる。彼の許に嫁に行くのだ。夫婦で獣医になるのなら、一人前の仕事ができるようになって、夫婦で駒谷農場に就職しろ」

二人は共に獣医師の免許を取り、ご主人は最初は実家のある長崎で獣医師として仕事をし、現在は娘夫婦が様似町の牧場を管理している。

駒谷さんは、中小企業も農業も同族である甘えが崩壊の原因なのだから、子供であろうとも経営者として不適任であれば、株主として止めさせなければならぬのだと話す。そして、後継者たちに駒谷さんはこう言う。

「自分と同じことをしたら駄目だ。時代は流れていくからだ。自分のやりたいことをやれ。しかも、時代に竿さすのではなく、その中で自分の役割を見出すのだ」と。

経営者とは、合理的な思考力を持ちつつも、ただ「良い作（一時の儲け）」を求めて土を肥すことに専心する者ではない。常に新たな農地を拓き美田に変えていくこと（永続性のための経営基盤の構築）を己れの役割として自覚し、「作」はその結果と考えることのできる人々なのである。まさに未来のために土を作り、美田を作る意志、開拓の志を持ち、そしてそれをなす者としての誇りのために生きようとする者なのである。そして現在とはすでに過去の結果である。現在にしがみつくと過去にしがみつくとことなのである。未来のための今を考えるのが経営者の仕事なのだ。

（昆吉則）